

# 旅の動機



柳瀬川ひろし

あまり水量のない小さな川が後ろの山から流れ出し奥まった住宅地を二つに分けていた。小都市の山間部ならどこにでもありそうなこの住宅地の西側を、道に迷いながらももう三度目になる洋式住宅の前で車を止め外に出た。

山から海に向かって吹く風はまだ眠っているようだ。どことなく重く停滞した空気が車をどこにも辿り着かせないように取り囲む。

私は車から離れ、次の角まで歩いて通りを覗いた。奥の方に並行して走っているらしい小路が見えた。が、目指す建物は見当たらない。さらに次の角まで進んだ私は期待もせずに通りを覗き込んだ。

「ヤマハチ醤油」と書かれた目立たない文字が子どもの目線に合わせるかのように横長の杉板に表示されているのに気付いた。

さっきもここは車を徐行させながら通ったはずだった。なぜ気付かなかったのだろう。不思議に思い角を見回すと生垣の根元に十センチ四方の小さな看板が、まるで見つけてくれるなどでも言いたげに座っていた。

私はもう一度奥の看板と矢印の方向を確かめると車に戻ろうとした。ちょうどそのとき濃密な空気の塊が私を包み込んだ。

さっき感じた停滞した空気感の正体はまさにこれだったのだ。

車に戻ると今度はウインドウを開け、辺りの空気を車内に取り込みながら角を曲がって「ヤマハチ醤油」の看板まで進んだ。

矢印の指し示す方向へハンドルを切ると右手前方に開けた空間が見えた。そこに車を寄せ奥に目をやると大きな背の高いそれでいて平屋のような建物が確認できた。

聳えるような蔵造りの日本家屋を想像していた私は住宅街に溶け込み目立つことなくひっそりと時を刻んでいる建物に無理な商いはしないという堅実さと正直さを感じ取った。

広場に車を停めそこに降り立つと発酵食品が生み出される蔵や工場に特有の酵母だか黴だかの香りが私の全身を包み込んだ。

予想していた蔵とは大違いのその簡素な建物に、私は別の意味で見惚れてしまった。

「見学ですか」

誰もいないと思っていた建物の中から、動きやすそうな現代的なモンペ姿の女性がにこやかに出てきた。

私が見学を申し出ると彼女は建物の反対側にある駐車場を案内してくれた。

ガイドブックで探しても杉樽が見学できる工場はこの他にはないようだった。

駐車場へ車を移動し外に出るとやはり醗酵した空気がさらに濃厚であろうと思われる工場へと私を導いた。蔵はさらにその奥だ。

最初の広場に戻ると女性が小さな羽根箒を手にして笑顔で立っていた。

「納豆は食べてらっしゃらないですよね」

「私は元来納豆は苦手です、まず口にすることはありません」

「そうですか。よかった。納豆菌は立ち入り禁止なのです。それでは洋服の埃を取らせてもらいます」

彼女は私のポロシャツとコットンパンツに軽く羽根箒を当てて埃を落とすと先頭に立って工場の中に入って行った。

観光者向けの販売商品だろうか。小瓶に入った数種類の製品は、落ち着いた書体で書かれたラベルで飾られていた。

私は様々な商品を横目で見ながら彼女の後に続いた。

もし杉樽が大仏だとすれば、その樽の並んだ蔵の内部はあたかも大仏殿とでも呼べそうな落ち着いた風情を醸し出していた。

柱や壁にはびっしりと黴のようなものが付着しており手で触れば蜘蛛の糸のようにべとべとと体を絡めとられるのではなかろうかという不安が広がった。

その反面、納豆が糸を引き長い年月をかけて化石化したようにも見え手で触れたとしてもべとつきなど微塵もないようにさえ思えた。

女性はそんな私の気持ちを察したのか立ち止ると愛おしそうに倉庫内を見回した。

「ここは掃除をしなくていいですよ。百種類もの菌が生活していますから。私はそこが気に入って嫁に来たのです」

「本当に掃除をしないのですか」

「はい。掃き掃除も拭き掃除も一切。もう百年、掃除をしていないと思いますよ」

彼女は本当にそこが嫁に来る決め手になったかのように目を細めて微笑んだ。

「私も三十年前、あなたと同じようにただの見学者としてここにやって来たんですよ」

私は思い切って訊いてみた。

「醤油造りに興味があったのですか」

「まさかあ。女子学生がそんな渋い興味を抱いてここに来ると思いますか」

彼女は教育学部に在籍していて、誰もが教育者の聖地として必ず訪れるこの地に来たのだと恥ずかしそうに答えた。そして近くの観光地としてたまたま目に付いた醤油造りを、ついでに見学に来たという。

そのときの女将一義理の母が、「ここは掃除せんでええから嫁に来たがです」と言ったそうさ。

彼女は階段を上へという仕草を見せ、先に進んだ。

階段を上るにつれて樽の内部が見て取れるようになってきた。もちろん蓋はしていない。夏は醗酵も一段落しているらしく上部は眠ったように静かだ。活発に発酵したであろう形跡を表面に残し、かつての麦や大豆たちは空気と接する部分を覆った膜の下で密かに息づいているように思われた。

「この階も掃除はしていないんですよ」

彼女は可笑しそうにそう言った。

確かに掃除されたきれいな状態を保っているとは言い難い床だった。しかし不衛生というのではなく、百年という時間と絶妙に調和のとれた空間を造り出していた。私は、嫁に来た頃うっかり掃除して女将に叱られたことがあるのではないかと考えた。若かった頃を懐かしむかのような彼女の横顔を見ていると、ふとそう思ったのだ。

「ご主人とはそのとき知り合ったのですか」

「いいえ。私は旅行から帰ると大学をすぐ中退し、簡単な荷物だけを持って住み込みで働かせてくれないかと無理やり押しかけて来たんです。勝手に住み着いたというのが真実に近いんですけどね」

私は、彼女のしそうなことだと納得した。

樽を一つ一つ覗いてゆくとどの樽の原料にも個性があるように思えた。一様ではないのだ。ひと際濃密な印象を受けた樽の前に立ち止っていると、彼女が戻って来て「分かりますか」と訊いてきた。

「この原料は他の物と比べるとかなり様子が違っているように思うのですが」

「一度絞った醤油で再度漬け込んだ物です。こういう濃厚な醤油を好む方もいらっしゃいます。後で味比べをしてみてください」

私は残り少なくなった奥の樽に目をやった。

「樽の入れ替えも計画的に進めています。その新しいのは秋田杉を使っています。お金を借りてやっと作ってもらったんです」

「もっと近くにも良い杉があるでしょう。秋田にこだわる理由でもあるのですか」

「秋田と言っても天然秋田杉。植林物と比べると強度が全く違います。百年使うのですからね」

この町にはいたるところに使われなくなった樽が置いてある。見かけるのはバス停が多かった。中に椅子がおいてあり雨も凌ぐことができる。樽はもちろん横倒しの状態だ。

映画村のバス停で樽を嗅いでみたが全く匂わなかった。そのことを訊いてみると一度ばらして洗うとのことだった。醤油の香りがある方が良いのにも思ったが、それは私だけかもしれない。

階段を下りると製品の説明を受け、利き酒ならぬ利き醤油を試した。

この島の佃煮がとびきり美味しいのは伝統ある醤油文化と深く結び付いているからだ と納得させられた。

私は決心して彼女にガイドブックを見せた。

「この記事を見て来てみたくなかったです」

「あっ、この小さい写真、私ですねえ。いやだ。名前まで出てる。ちっとも知らなかった」

彼女は醤油の小瓶と大瓶を見せてくれた。内容量から言うと大瓶を買う方がはるかにお得だ。だが、多くの観光客は小瓶を買う。彼女が考えた戦略なのだそうだ。

私は思い浮かぶだけの知人に何種類かの醤油の小瓶を購入し代金を支払った。そして、ついに用意してきた言葉を彼女に告げた。

「私のことを覚えていますか」

彼女は一瞬下を向いたが、顔を上げたときには笑っていた。

「ごめんなさい。以前にも見学に来られたことがあるのですか」

「いや、そうではありません」

「どこでお会いしたのでしょうか。思い出せなくて申し訳ありません」

「私は門田俊明と申します。あなたは旧姓岡村みみさんですよ」

「はい。旧姓は岡村ですが、おそらく同性同名の人違いだと思いますよ」

「あなたの中退した大学は〇〇大ですよ」

「そうです」

私は五十歳の記念に小学校の修学旅行以来のこの島を訪れてみたくなかった。そして買い求めたガイドブックの記事に「山下みみ」の名前を見付けた。姓は違っていても「みみ」は多い名前ではない。

みみの名前を見たとき、大学四年の頃たった一か月だけ付き合った彼女のことを急に思い出した。ガイドブックで見る限りみみであるという確信は持てなかった。しかし違っていても構わないという気持ちだった。五十歳とは異なる旅の動機がほしかったのだ。

みみが否定するのなら何か訳があるのだろう。私はそれ以上の詮索は止め蔵を後にした。

## 旅の動機

<http://p.booklog.jp/book/102479>

著者：柳瀬川ひろし

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/hirogontacb1222/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/102479>

ブックログ本棚へ入れる

<http://booklog.jp/item/3/102479>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのパー（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社ブックログ